

# 独奏楽器としてのヴィブラフォン音楽の確立

～クレア・オマー・マッサーの作品を例に～

會 田 瑞 樹

(令和4年3月)

郡山女子大学紀要 第58集別冊

(Vol.58) PP.115～131

郡山女子大学 郡山市開成3丁目25番2号

# 独奏楽器としてのヴィブラフォン音楽の確立

～クレア・オマー・マッサーの作品を例に～

Establishment of solo vibraphone music

～ Taking Clair Omar Musser's works as an example ～

會 田 瑞 樹<sup>※</sup>

Mizuki Aita

Born in the United States in 1921, Vibraphone will celebrate its 100-year history in 2021. Among the innumerable musical instruments in the world, Vibraphone, which clearly shows the name of the creator and the time of development, has a new history, and the development of research on playing methods is awaited. In this article, I read an interview with a prominent vibraphone player in an article in Newsweek magazine published on May 15, 1967, and explained how the ancestors perceived Vibraphone and what kind of development they wanted. A textbook for beginners published in 1939 by Clair Omar Musser (1901-1998), who also has a face as a percussion player, an educator, and a musical instrument developer published in the United States. An analysis of both the 「Modern Vibraharp Method」 and 「The Master Solo Arrangement Vibraharp Vibraphone and Vibra-celeste」 arranged for advanced vibraphones in 1941, and their artistic value. Through the above analysis and play, we will learn how our predecessors perceived the vibraphone, present a new perspective on vibraphone performance, and try to make proposals for the future.

## 1. ヴィブラフォンについて

1921年、インディアナポリスのリーディー社 (Leedy Manufacturing Company) のヘルマン・ウィンターホフ (Hermann Winterhoff/1876～1945) によってヴィブラフォン (Vibraphone) の原型が製造される<sup>i</sup>。黎明期のヴィブラフォンの音色は、1924年11月25日、ニューヨークにおいて木琴奏者として名高いジョージ・ハミルトン・グリーン (George Hamilton Green/1893～1970) 率いる Green Brothers Marimba Orchestra によって演奏、録音されたワルツ《When it's love-time in Hawaii》でヴィブラートを含んだ柔らかな金属の音色が冒頭で確認できる。<sup>ii</sup> その後シカゴにあるディーガン (Deagan) 社の社員であったヘンリー・J・シュルター (Henry J. Schluter/1889～1973) が後を追うようにヴィブラフォンを発明、改良を続けた。特にシュルターは雑音の除去など、この楽器に様々な改良を施した人物とされる。<sup>iii</sup> 1927年の発売開始にあたってディーガン社はこの楽器を「ヴィブラハープ (Vibraharp)」と命名、商標登録を行う。

※幼児教育学科

よってこれ以降、二つの名前が混在することになる。

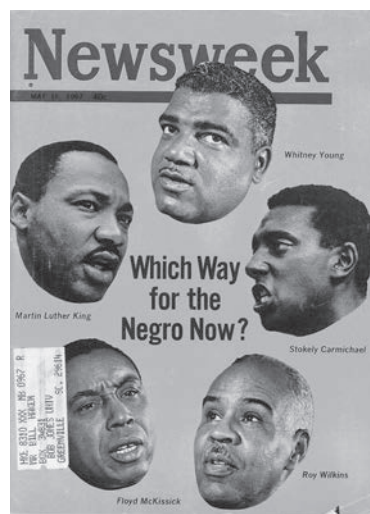
1930年10月、ライオネル・ハンプトン (Lionel Hampton/1908～2002) がルイ・アームストロング (Louis Armstrong/1901～1971) の勧め<sup>iv</sup>で演奏に用いたことがジャズ・ヴィブラフォンの事始めとされており、シカゴではレッド・ノルボ (Red Norvo/1908～1999)、ニューヨークではエイドリアン・ロリーニ (Adrian Rollini/1903～1956) が自身の演奏にヴィブラフォンを取り入れ、アメリカ全土に広まっていった。1934年にはアルバン・ベルク (Alban Berg/1885～1936) 作曲のオペラ《ルル (Lulu)》(1934.作曲者の逝去により未完/複数の補筆完成版がある)でもヴィブラフォンが用いられた。(しかしヴィブラフォンパート譜<sup>v</sup>を見ると音域外の音も多数頻出しており、作曲者がその性能を理解していたか些か疑問である。)

注：ヴィブラフォンとヴィブラハーブの違いについて

そのため、本稿ではヴィブラフォンとヴィブラハーブの名称が二重に頻出する。よって本稿においてはヴィブラフォンとは楽器の総称であり、ヴィブラハーブとはディーガン社製造によるものと定義する。

## 2. ニューズウィーク誌<sup>vi</sup>を読み解く ～社会とヴィブラフォンのつながり～

ヴィブラフォンの名前はジャズ分野の優れたプレーヤーの存在によって広く世間一般に知られるようになった。筆者は1967年5月15日に発行された「ニューズウィーク (Newsweek)」の現物を入手し、一面に渡る「The Vibe Tribe」と冠されたヴィブラフォンに関する記事を読み解いた。ここではライオネル・ハンプトン、ミルト・ジャクソン (Milt Jackson/1923～1999)、ゲイリー・バートン (Gary Burton/b.1943)、ディーガン社の開発マネージャーであったヘンリー・J・シュルターの短いインタビューが記されており、人物ごとの発言と彼らのヴィブラフォンに関する所感をまとめてみたい。(この章における鉤括弧箇所は全てニューズウィーク誌からの引用。日本語訳は筆者。)



### (1) .ライオネル・ハンプトン本人のインタビューから

「なぜあなたはその楽器を選んだのか。」と言う質問に対し、「電気時代の到来を感じたんだよ。」と述べるハンプトンはこの楽器の魅力に対して次の様に述べている。「速くも、遅くも演奏できる。大きくも、柔らかくも。その中間でも。感傷的なバラードも、ハードロックも、同じくらい使いやすいさでね。」また、ミルト・ジャクソンのことについては、「僕は、ミルト・ジャ

クソンに、彼がデトロイトの少年時代に、彼の初めてのマレットを与えたのさ。」と半ば冗談めいた発言を行なっている。自らが楽器を始めた経緯については次の様に述べている。「1931年（原文ママ）僕はカリフォルニアのカルバーシティというところで、Les Hiteのバンドで演奏（ドラミング）していた。僕はあれこれいじって、その音はとにかく魅惑的だったんだ。レイ・アームストロングが僕らの中心となって、彼は僕を聞いて、僕は彼を聞いて、彼と共に録音を行なって。それがすべての始まりさ。」

#### (2) . ライオネル・ハンプトンに対するニューズウィークの所感

ハンプトンをすべてのヴァイビストの父と形容する一方で、彼は未だ、打楽器的なヴァイビストだとも指摘している。「ハイ・エモーショナルな、火の玉の様な気質とドライブ感、うめき声と共に、ショーマンスタイルの純粋な技巧。」と形容しつつ、ハンプトンの次の様な発言を引き合いに出し、技術的な問題点をも示唆している。「ドラムからヴァイブに移り変わる時に、最も難しいことは、僕の左手を右手と同じ力で使うことなんだよ。」

#### (3) . ミルト・ジャクソン本人のインタビューから

「なぜあなたはその楽器を選んだのか。」という質問に対し、「みんなサクソやトランペットをやっていたからね。」と述べ、ヴィブラフォンという楽器を一般人に説明することに難儀していることを明かしている。「彼らはヴィブラフォンとシロフォン、マリンバを混同させているからね。」彼は言う、「説明しようかなと思う時、僕はちよどこう言うんだよ、みて！あれはライオネル・ハンプトンが演奏している楽器さ。そうすると彼らは分かってくれる。」ヴィブラフォンという楽器の魅力について彼は次の様に述べている。「機械であること。どんなに強く奏でも、サクソやホーンに溺れたりしない。音を振動させている時だけ、自分はメカニカルな機械を使っているなど感じることはある。僕にとって旋律を演奏することに勝るものはないし、ヴァイブほどその雰囲気を上昇させてくれるものはないと思っている。」

#### (4) . ミルト・ジャクソンに対するニューズウィークの所感

ゲイリー・バートンによる「自然で流れる様な音色を真に作り出す奏者だ。」という発言を紹介し、ジャクソンの演奏を次の様に褒め称えている。「ハンプトンと違って、ジャクソンは常に遅いヴィブラートをを用いて、反射を抽出し、ソウルフルな音色で、旋律的にバロック音楽をも奏でる。彼はヴァイブの限界を拡張し、目新しさの偏見を取り除き、思慮深いコードの変更と、想像力豊かで、クールでブルーな変奏を彼の好むスローバラードの中で奏でていった。」

#### (5) . ゲイリー・バートン本人のインタビューから

「なぜあなたはその楽器を選んだのか。」と言う質問に対し、「コンクールを避けるにはいい手段だと思ったのさ。好奇心だね。」と述べ、ヴィブラフォンに対しては登場する3人の中では最も若い世代であると同時に最もクールな発言をしている。「もちろん、それは基本的に、機械的で金属的です。人の声の多様性や、音域の範囲が不足しています。しかし、ヴァイブには音色の強度と強弱の幅の広さがあり、僕はそれを楽しんでいますよ。とりあえず、僕はヴァイブという楽器が音楽に貢献しているとは思っていません。演奏家がしているのだと。」

#### (6) . ゲイリー・バートンに対するニューズウィークの所感

「通常の三本や四本マレットを通して、ヴァイブの範囲を超えた対位法の線の確立や複雑なコードや和声の探求といった技術的制約の打破に果敢に挑み続けている。」と指摘し、旋律重視のジャクソン、エモーショナルな情熱を重視するハンプトンとは異なった奏者の到来を指摘している。一方で楽器に対しての愛着の面においては、いささかクールな印象も否めない。

#### (7) . ヘンリー・J・シュルーターについて

1905年3月16日、シカゴ・デイリーニュースの求人欄に「働くことを厭わない屈強な少年求む。」の告知を見たシュルーター16歳は、床磨きの仕事からディーガン社に勤務し、音程を聞き分ける類まれな耳の素質をディーガン社の創業者で総裁であったジョン・カルホーン・ディーガン (John Calhoun Deagan/1853～1934) に見出され、そのキャリアをスタートした<sup>vii</sup>と本人は述べている。ヴィブラートを持つパイプオルガンの魅力に衝撃を受けたシュルーターは、ヴィブラハープの開発に取り組み、1927年、現在とほぼ変わらない同型の楽器を開発した。以降40年の間その意匠は変わることがないとされている。<sup>viii</sup>

ニューズウィーク誌のインタビューにおいて、現在活躍するヴィブラフォン奏者が楽器に対してどのように貢献しているかを尋ねられたところ、彼はこう述べている。

「それは不満である。「彼らはマリンバの様に演奏している。」シュルーターは不平を言う。「ヴァイオリンや声を添え、ピアノの代わりとなる様に作ったのだ。ああなんてこと。彼らは知らないのだ、その音がどれほど甘美なものかを。」

以上のように、優れた3人のヴィブラフォン奏者の発言をも一蹴してしまう発言でニューズウィークの記事は締めくくられている。

#### (8) . ニューズウィーク誌の記事から読み解ける事柄

1933年に創刊され、タイム誌と並んでアメリカ国内外の社会情勢を伝え続けるニューズウィークにヴィブラフォンに関する記事が1967年時点で掲載されたことは、アメリカ国内に

においてヴィブラフォンに対して一定の認知度があったことを裏付けるものであろう。それぞれの奏者の発言は音楽雑誌ではなかなか取り上げられることのない発言であることも注目すべき点である。(特にミルト・ジャクソンは購入した新邸宅の価格まで公表しており、ミュージシャンの一攫千金の可能性を思わせる箇所も散見された。)

音楽面においては、開発されてまもないヴィブラフォンをどのように取り扱っていくか、奏者によって千差万別であったことがうかがえる。もともとドラム奏者であったライオネル・ハンプトンはその情熱をヴィブラフォンに向け、ミルト・ジャクソンは旋律楽器としての側面を重視し、ゲイリー・バートンはより複雑性を求めた。しかし開発者であったヘンリー・シュルターは、そのいずれにも満足を示さなかった。

それでは、シュルターが真に目指した「ヴィブラフォンの甘美な音色」とはなんだったのか。それを解き明かす手がかりを探し出すために、シュルターと同時代人であり同僚でもあり、奏者、作曲家としてもこの楽器の魅力を提示した人物、クレア・オマー・マッサーに触れなければならない。

### 3. クレア・オマー・マッサー (Clair Omar Musser /1901 ~ 1998) について

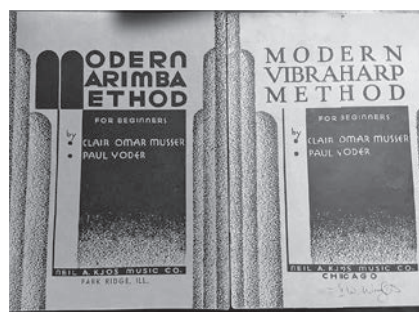
#### (1) .マッサーの略歴

10月14日、アメリカ・ペンシルベニア州生まれ。10代の時に木琴の勉強を始める。若くして初期のワーナーブラザーズヴィタフォン映画で演奏し、名手として知られるようになる。1930年からは、ディーガン社のチーフデザイナー、プロモーターとしても活躍。<sup>x</sup> 1933年にはシカゴ万国博覧会において100人のマリンバオーケストラによる演奏を行うなど、鍵盤打楽器の普及に尽力した。1942年から1952年までノースウェスタン大学で教鞭をとり、ヴィダ・シェノウェス (Vida Chenoweth/1928 ~ 2018) を含む多くの後進を輩出した。作曲家としてもいくつかの練習曲を遺している。<sup>xi</sup>



#### (2) .マッサーによる楽器の普及活動

以上のようにマッサーはマリンバ奏者としての側面が強調されがちであったが、このほどヴィブラフォン誕生時期に最も近い教本を発見した。クレア・オマー・マッサー / ポール・ヨルダー (Paul Yoder / 作曲家 / 1908 ~ 1990) 共著による《Modern Vibraharp



Method》(1939)である。「ヴィブラハープ」の表記があるのでディーガン社の製品のプロモートも兼ねたものと推察することもできる。さらにマッサーは、1941年に上級者向けヴィブラフォン奏者のための《Master Solo Arrangement Vibraharp, Vibraphone and Vibra-celeste》を出版している。

## 4. Modern Vibraharp Method の分析とその音楽的価値

### (1) . 概要

クレア・オマー・マッサーとポール・ヨーダーの共著になっており、1939年にシカゴ Neil A.KJOS music co.より出版されたペーパーバックの教則本である。価格は一冊あたり1ドル。24ページのごく薄い冊子ではあるものの、ヴィブラフォン最初期の教則本であると推察される。

冒頭からバチの持ち方（左手に二本、右手に一本の合計三本まで）、姿勢にはじまり、ペダルの操作方法、ハンド・ダンピング（打った直後に余韻をコントロールするヴィブラフォン独自の技法）についての解説と、その実践のための楽曲が用意されている。

なお、ここで登場する楽器はフルサイズ(F3-F6の3オクターヴ)のヴィブラハープではなく、2.5オクターヴ(C4-F6)のタイプ(Deagan Vibraharp-30,1938-42年に製造)であることに注目したい。この楽器はマッサーによる制作とされており、価格は当時185ドル<sup>xiii</sup>であった。1939年のアメリカ人一人当たりの年間個人消費平均値は512ドル<sup>xiii</sup>であり、ニューディール政策による経済力の上昇機運も高まって、子供たちへの情操教育への投資にまで手が回ることも想像に難くない。楽器のサイズもごくコンパクトであることから、この教本は子どものための情操教育の側面を担っていた事、そしてそれを足掛けに楽器を知ってもらおう事、ひいては「より上位タイプの楽器購入」へと導く伏線を引いているとも言えるだろう。

### (2) . 各ページの内容

#### 1 ページ目

For Beginners と記されており、一人での稽古、または複数のグループレッスンに用いることを奨励している。またここで「ハンド・ダンピング奏法」はヴィブラフォン演奏に最も重要であると注意書きが記されている。ハンド・ダンピング奏法について、インターネット上ではゲイリー・バートンがその奏法を確立したという記事も散見されるが、すでにこの頃から奏法として確立していたことを指摘したいと思う。

#### 2 ページ目

マレットの持ち方、鍵盤に対してどのようにマレットを置くかを示している。

#### 3 ページ目

ヴィブラフォンの音域を示している。前述の通り「Deagan Vibraharp No.30」を紹介してお

り、ディーガン楽器の販売促進も兼ねた教本であることがうかがい知れる。写真にもマッサー自らが写っていることが確認できる。気軽に家庭で始めるためのモデルとして楽器の普及を考えたディーガン社の戦略も窺い知れよう。

#### 4 ページ目

全音符による単音の練習。

#### 5 ページ目

2分音符の練習。

#### 6 ページ目

右手と左手の同時打ちの練習。

#### 7 ページ目

四分音符を左右交互に演奏する練習。またペダルに関しても「Without pedal」「Pedal all notes」等細やかな指示が増えている。

#### 8 ページ目

へ長調の音階練習。これまで4拍子のみだったのに対し、このページから3拍子の練習も登場する。

#### 9 ページ目

分散和音の練習。ハ長調とへ長調の二つ。

#### 10 ページ目

Alla Breve (二拍子で)の練習。ハ長調とへ長調。

#### 11 ページ目

ト長調の音階練習。

#### 12 ページ目

復習。へ長調3拍子、ト長調4拍子、ハ長調3拍子の練習曲。

#### 13 ページ目

6/8拍子の練習。変口長調が登場。

#### 14 ページ目

分散和音の練習。ここでの練習曲は《Dream of Love》(リストの愛の夢)であり、かなり発展的な楽曲による練習になる。

#### 15 ページ目

付点音符の練習。

#### 16 ページ目

重音奏法の練習。上の声部を右手で、下の声部を左手にして全ての音をトレモロでとの指示がある。



#### 17 ページ目

重音奏法の練習。ペダルなしで演奏するよう指示がある。

#### 18 ページ目

ハンド・タンピング奏法についての詳細な記述がある。

「ハンド・ダンピング奏法とは、ヴィブラフォン奏法の特徴的な、さらなる芸術的結果を希求するための専門用語である。ハンド・ダンピングはペダル操作から独立した確実な消音を、奏者の手によって、音を調整するシステムの稽古である。

例えば、レッスン 15 の 1 の課題曲の音符の上に明示されている小さな十字のマークは、手で音を止めることを示す。しかし、足のダンパーは開放したままである(足で踏んだまま)。

このシステムにおいて、演奏者は明確に十字で示された音を右手のマレットでうち、しかし直ちに左手が続き、左のマレットを音盤において消音効果を生みだす。右手のマレットは次の音を打つために進んでいく。このシステムはピアノにおいても効果的にもたらせており、サスティーンペダルに加えてそれぞれの楽音の個別のダンパーがある。

ハンド・ダンピング奏法を忠実に稽古したヴィブラフォン奏者はすぐにこの楽器の偉大な芸術的成功を収めることができるだろう。」(筆者による日本語訳)<sup>xiv</sup>

#### 19 ページ目

左手に 2 本のマレットを持つ練習。ここでは俗にいう「マッサーグリップ」を取り上げている。(マッサーグリップとは日本国内ではあまり定着はしなかった二本マレットの持ち方の一つであり、現在はリー・ハワード・スティーブンス (Leigh Howard Stevens/b.1953) グリップという名前でその技術が継承されている。)

#### 20 ページ目

密集、開離和声の練習。

#### 21 ページ目

ハンド・ダンピング奏法の練習。

#### 22 ページ目

音階練習(毎日の稽古)と記されている。

#### 23 ページ目

半音階練習(毎日の上達稽古)と記されている。

#### 24 ページ目

《Annie Laurie》が二段譜面で記されている。

上段が旋律で、下段はスウィングで変奏曲の形式をとっている。

### (3) . 練習曲の多様性と會田瑞樹による実演

音楽的基礎練習の後に、それぞれのページに短い練習曲が掲載されている。これらは38曲にも及び、ジャンルも様々である。これらを6つの視点から区分を試みた。またそれぞれのリンクから各楽曲を會田瑞樹が演奏した動画にアクセス可能である。右図のQRコードからまとめた再生も可能である。



▲ 會田瑞樹による演奏リンク

#### a. アメリカ合衆国由来の歌 <https://youtu.be/bxe2WqCv4lk>

15. 《Ten Little Indians》(アメリカ童謡) 25. 《Maryland, My Maryland》(メリーランド州歌)  
26. 《The Old oaken Bucket》(1826年 /G.F. Killallmark 作曲 / 譜面に誤植あり。) 28. 《Hear Dem Bells》(1880年 /D.S. McCosh. 作曲) 34. 《Good Night Ladies》(1867年 /Edwin Pearce Christy 作曲 /19世紀に大流行したミンストレル・ショーのために作曲された作品。) 35. 《Stars of the summer night》(1887年 /Ethelbert Nevin 作曲)

#### b. 英国由来の民謡、賛美歌 <https://youtu.be/AdQx9qiK3bY>

5. 《Abide with me》(スコットランド由来の賛美歌) 7. 《Good king Wenceslas》(英国賛美歌)  
11. 《Long Long Ago》(イギリス民謡) 16. 《Love's old sweet Song》(アイルランド民謡)  
21. 《Drink to me only with thine eyes》(古いイギリス民謡 / シェイクスピアの歌詞がある)  
27. 《Juanita》(1855年 Caroline Norton 作曲) 30. 《Blue bells of Scotland》(スコットランド民謡)  
33. 《All thru the Night》(ウェールズ民謡) 37. 《Londonderry Air》(アイルランド民謡)  
38. 《Annie Laurie》(スコットランド民謡)

#### c. そのほかの国の民謡 <https://youtu.be/J133LlvwseU>

1. 《Twinkle, Twinkle, Little Star》(フランス民謡) 2. 《Lightly Row》(ドイツ民謡) 6. 《At pierot's door》(フランス民謡) 8. 《Du, Du, Liegst Mir im Herzen》(ドイツ民謡) 17. 《Santa Lucia》(ナポリ民謡) 20. 《Aloha Oe》(ハワイ民謡) 24. 《The Merry Swiss Boy》(ドイツ民謡)  
36. 《Dark Eyes》(ロシア民謡)

#### d. クラシック由来の音楽 <https://youtu.be/Uh8IdJ6d2Is>

12. 《Merry Widow》(フランツ・レハール (Franz Lehár /1870~1948) 作曲のオペラ《メリー・ウィドウ The Merry Widow》から) 23. 《Dream of Love》(フランツ・リスト (Franz Liszt/1811~1886) 作曲《愛の夢》) 31. 《Lullaby》(ヨハネス・ブラームス (Johannes Brahms/1833~1897) の子守唄) 32. 《Vilia》(レハール作曲のオペラ《メリー・ウィドウ》から)

e. 賛美歌、クリスマスソング <https://youtu.be/YDXGTgFCVg>

3. 《Rousseu's Hymn》(賛美歌) 4. 《Jolly old St.Nicholas》(クリスマスソング) 9. 《Faith of Our Fathers》(賛美歌) 10. 《Sun of my soul》(賛美歌) 13. 《Jingle Bells》(クリスマスソング) 22.《It came upon a midnight clear》(クリスマス賛美歌) 29.《Silent Night》(クリスマス賛美歌)

f. 今回の調査では不明 <https://youtu.be/pi8QYX39mpk>

14. 《Andantino》18. 《Music in the Air》19. 《Boat Song》

#### (4) . 全体の内容と練習曲の傾向とその分析

ヴィブラフォン演奏に関する技術はもちろんのこと、楽譜の読み方、密集 / 開離和声や分散和音、全調のスケールといった楽典的知識も合わせて学ぶことができるように施された音楽的基礎が行き届いた教材と言える。

選曲されている練習曲もアメリカ合衆国の歴史そのものを想起させる見事なラインナップだと筆者は感じる。イギリス由来の音楽とアメリカ合衆国ゆかりの民謡、賛美歌や他国の様々な民謡。アメリカの歩んできた歴史と誇りが内包されていると言える。

この教本は、ただ漫然とヴィブラフォンを演奏するのではなく、クラシック音楽の基礎が行き届いてこそ、豊かな音楽を表現できることを示唆している。そしてこの教本を終えた上級者向け教本が、次に紹介する《Master solo arrangements : vibraharp, vibraphone and vibra-celeste》である。

### 5. Master solo arrangements : vibraharp, vibraphone and vibra-celeste について

#### (1) . 概要

1941年、シカゴのGamble Music co.により出版され、価格は一冊あたり1ドル。全四巻にわたるこの曲集は難易度別に分かれており、初期ヴィブラフォン音楽の息吹を感じる重要な資料である。なおここで三つ目の名称となる「Vibra-celeste」が登場しているがこの名称は短命に終わったようだ。<sup>xv</sup> これらの楽譜資料をアメリカ・ユタ州のブリガム・ヤング大学 Harold B. Lee Library の尽力により、第1巻と第4巻を入手した。さらにカナダの西オンタリオ大学音楽図書館に所蔵されている第2巻、第3巻も国際文化会館図書館の協力を得て閲覧することができた。

全曲二段譜で書かれており、F3-F6の3オクターヴの



ヴィブラフォンを用いる。

巻頭文においてヴィブラハーブの楽譜表記が重要な段階にあることを提言し、マッサー自身が様々な分野の専門家から意見を聞き、この二段譜の表記にたどり着いたことを述べている。<sup>xvi</sup>

楽譜にはハンド・タンピングの指示やペダルの位置まで細部にわたって記載があり、そのこだわりを垣間見ることができる。マレットは左手に二本、右手に一本がこの教本のスタイルとして提言しており、同時に奏でるのは三和音以内で、それ以上の音がある場合はアルペジオで奏すると述べている。

## (2) . 楽曲の多様性

全四巻であり一冊あたり3曲収録されている。巻が重なるごとに難易度は上がるとされる。全曲の編曲者はマッサーが担当した。

### 第1巻 (グレード 3)

- ・ Lullaby (Brahms)
- ・ Believe me if all those endearing young charms (Irish folk song)
- ・ Famous Waltz (Brahms)

### 第2巻 (グレード 4)

- ・ Prelude (Chopin)
- ・ Serenade (Schubert)
- ・ Nocturene (Chopin)

### 第3巻 (グレード 5)

- ・ Evening star (Wagner)
- ・ Ave Maria (Schubert)
- ・ Annie Laurie (Scott)

### 第4巻 (グレード 6)

- ・ Humoresque (Dvorak)
- ・ Berceuse (Godard)
- ・ I dream of Jeannie (Foster)

## (3) . その芸術的価値 ～全巻の比較分析～

### 第1巻

- ・ Lullaby (Brahms)

原曲はヨハネス・ブラームス (Johannes Brahms/1833～1897) 作曲《五つの歌曲 作品番号49》のうちの変ホ長調の一曲。ここではへ長調に移調されている。この曲は《Modern Vibraharp

Method》の17ページにも登場しており、ここではさらに音楽的装飾楽句が盛り込まれている。

・Believe me if all those endearing young charms (Irish folk song)

原曲はアイルランド民謡で日本語訳では「春の日の花と輝く」とされる。ハーバード大学の卒業式でも歌い継がれる音楽として知られている。編曲は旋律が明確に演奏できるよう配慮されたものとなっている。

・Famous Waltz (Brahms)

原曲はヨハネス・ブラームス作曲によるピアノのための《ワルツ第15番 変イ長調 作品番号39-15》であり、ここでは原調のまま、原曲の展開部に当たる箇所は省略されて編曲されている。また旋律もヴィブラフォンの特性に合わせて、元の旋律に付点やフェルマータを多用するなどして自由に歌い上げる効果を得られるように整えられている。

## 第2巻

・Prelude (Chopin)

日本では胃腸薬のコマーシャルでも用いられた作品番号28の第17番。原曲はイ長調であるが変イ長調に転調されている。しみじみとした響きが印象深く、ピアノ作品をヴィブラフォンで豊かに演奏するための分散和音の工夫がなされている。

・Serenade (Schubert)

歌曲集「白鳥の歌」D.957より第4曲「セレナーデ」にあたる。古くはフランツ・リストもピアノのために編曲を手がけている。巧みな旋律の優美さがシューベルトの類まれな才能を思わせ、このような楽曲をヴィブラフォンで演奏しようと目論むマッサーの先見の明にも脱帽するばかりである。

・Nocturne (Chopin)

作品番号9の第2番。原曲通りの変ホ長調で編曲されている。原曲の趣を損なうことなく、ヴィブラフォンという楽器の可能性に表現の奥深さを託した名編曲と言えよう。

## 第3巻

・Evening star (Wagner)

楽劇《タンホイザー》の第三幕のアリア。特に有名であり単独での演奏や器楽による編曲も多い。ここでは変位和音や転調を用いて、より高度な和声感を身につけるための配慮も随所に見られる。

・Ave Maria (Schubert)

原曲は、歌曲集「湖上の美人」の第6曲にあたり、3作からなる《エレンの歌 第3番 作品番号52-6 D.839》にあたる。優美な旋律を引き立たせるヴィブラフォンのアルペジオ奏法や、細部に至る消音の指示により、より高度な芸術的表現を求めている。

・ Annie Laurie (Scott)

原曲はスコットランド民謡。ウィリアム・ダグラス (William Douglas 1672? - 1748) の詩をもとにして作られ、作曲は 1838 年、スコットランドの女流音楽家ジョン・ダグラス・スコット夫人 (Alicia Scott/1810-1900) による。

1854 年のクリミア戦争で、未亡人や孤児となった人たちへの慈善活動のために出された歌曲集に掲載されたことで、軍楽隊も演奏するようになり世界中に認知された。故郷を思うしみじみとした抒情がヴィブラフォンに乗って豊かに広がっていく。

#### 第4巻

・ Humoresque (Dvorak) <https://youtu.be/joPvISX9bWI>

原曲はアントニン・ドヴォルザーク (Antonín Leopold Dvořák/1841 ~ 1904) 作曲《ピアノのための 8 つのユーモレスク作品番号 101 より第 7 曲 変ト長調》である。ここではト長調に移調されている。二段譜で書かれており、原則的には上段を右手、下段を左手で演奏しつつも、9 連音符や 5 連音符などの装飾的で素早い楽句は両手で演奏することになる。そのようは素早い楽句が来る際には、フェルマータ記号などが記され、十分に時間をとって演奏が可能である。

・ Berceuse (Godard) [https://youtu.be/uTZW5C\\_OsE8](https://youtu.be/uTZW5C_OsE8)

原曲は 19 世紀フランスの作曲家であるバンジャマン・ゴダール (Benjamin Godard/1849 ~ 1895) のオペラ《ジョスラン (Jocelyn)》の中のアリアとして作曲された《子守唄》である。冒頭は上段に音符が集中しているが上声部を右手、下声部を左手で演奏することが合理的であろう。美しい旋律と、それを補うハーモニーの豊かさをここに感じるができる。

・ I dream of Jeannie (Foster) <https://youtu.be/Upklu-quW34>

原曲は 1854 年にスティーブン・フォスター (Stephen Collins Foster/1826 ~ 1864) が作詞作曲した歌曲。日本では「金髪のジェニー」として親しまれた曲でもある。アメリカ音楽の父としても名高いフォスターの美しい旋律を大切にしつつ、重層的な和音の伴奏形が多数見受けられる。旋律の一音ごとにハーモニーを変えていくなどの細やかな編曲のセンスが光り、多層的な音楽作りを目指している。

#### (4) 音楽的内容への所感

第 1 巻に関してはテンポ設定の遅い作品が多く、旋律の繰り返しや楽曲の長さもごく短いものが多い。第 2 巻はピアノのための楽曲を見事にヴィブラフォンに変換した名編曲集であり、楽曲の魅力を損なうことなく、ヴィブラフォンの魅力であるアルペジオ奏法を駆使してその音楽性を引き出している。第 3 巻は「歌い上げる」という点においてより高度な要求が多く、音楽的に表現することを求めている。第 4 巻ではユーモレスクには細やかな楽句の変化、ゴダールの子守唄では場面ごとの変化が求められ、フォスターにおいては借用和音の多用も見られ、

音楽的な響きの豊かさや多声部にわたる音の広がりをコントロールすることを求められているといえる。

## 7. 結論 ～マッサーとシュルーターが夢見たこと～

これらの曲集を通してマッサーはヴィブラフォンの可能性を大きく広げようと果敢に取り組んでいる。それほどまでにこの楽器は「魅せる」魔力を兼ね備え、それに応える彼の発想は非凡であり先駆的であった。

先述したヴィブラハーブ開発者であるヘンリー・J・シュルーターの発言をもう一度思い返してみよう。

「ヴァイオリンや声を添え、ピアノの代わりとなる様に作ったのだ。ああなんてこと。彼らは知らないのだ、その音がどれほど甘美なものを。」

同時代人であるマッサーの二つの教則本の分析を通して、私は彼らがヴィブラフォンの独奏における表現の可能性を強く感じ取っていたと結論づけたい。楽典的知識を正しく持ち、豊かな音楽性を兼ね備え、音の響きを鋭く聞き分ける耳を持ち、ハンド・タンピング等の繊細な音の消音技術、ペダリングの運動性をコントロールする技術。それらを体得した上級者には、クラシック音楽におけるピアノの作品や、オペラのアリアといった「多声部にわたる音楽」を「独奏」で表現することができる。それほどまでにこの楽器には音楽的可能性を秘めていることを二人は強く信じていたに違いない。二人はジャズ・ヴィブラフォンの文脈とは異なったヴィブラフォンの可能性を見出していたといえる。

いま、彼らの夢見たヴィブラフォンの世界を私たちが継承、発展する段階に入ったと筆者は考える。

## 8. その後のマッサーの生涯

ヴィブラフォンへの強い情熱を注いだマッサーは、1952年、51歳の折にノースウェスタン大学の職を辞し、その拠点を西海岸へ移しオックスフォード大学で工学の博士号を取得。音楽の第一線を退き、宇宙事業への興味を高めていく。音楽と科学への関心は1970年代、ヴィブラフォンによく似た響きを持ち、拾い集めた隕石で作りとされる「Celestaphone（セレストアフォン）」の開発、晩年に至るまで子供達への知育楽器の発明に勤しみ続け、1998年11月7日に逝去するまで好奇心に満ち溢れた人生を送った。<sup>xvii</sup>

## 9. 今後の研究展望

ディーガン社はヴィブラフォンの設計にとどまらず、創設当初はグロッケンシュピール、シロフォン、木琴、マリimba、ミュージカルディナーチャイム、カリヨンといった多数の楽器製

造を手がけた。これは1800年代後半からのアメリカの歴史とも重なり実に興味深い側面がある。さらにそれらの製品がどのように日本に輸入され、用いられたかについても、実に興味深い発見が続いている。今後も研究を継続し、ディーガン社の発展とその終焉に至るまでを様々な立場から追っていきたいと考えている。また、マッサー作品による演奏会の開催をはじめ、ヴィブラフォン音楽の歴史を辿る作品集の制作も視野に入れていきたい。

ヴィブラフォンの響きは多くの人の心を魅了し、捉えて離さない。それは数々の先人たちの資料からも明らかであり、筆者は今後も先人たちの思いを胸に、独奏による魅力を探求し続けていきたいと考えている。

## 謝辞

本稿執筆にあたりアメリカ・ユタ州のブリガム・ヤング大学 Harold B. Lee Library の図書館司書 Alyssa Meldrum に心から感謝の意を述べたい。見ず知らずの日本人にマッサーの楽譜をデジタルデータに変換し閲覧許可に向けて奔走してくださったことに感謝してもし尽くせない。国境を越えるインターネットの力を感じた。筆者はアメリカと日本の新しい友好関係のために、今後も音楽で尽力していきたい。

## 付録 (アメリカ / ヴィブラフォン / 世界史年表) <sup>xviii</sup>

年	アメリカ	ヴィブラフォン	世界
1853		ジョン・カルホーン・ディーガン生	ペリー、浦賀に来航
1860	共和党候補リンカン当選		条約批准のため日本使節訪米
1861	南北戦争		
1865	南北戦争集結、リンカン暗殺、KKK 結成		明治維新
1871		J.C. ディーガン、米海兵隊に入隊	
1880		J.C. ディーガン、各地でクラリネット奏者として活躍したとされる	
1886	自由の女神完成		大日本帝国憲法公布
1897		J.C. Deagan Musical Bells をシカゴに開店	
1898	スペインに宣戦		キューリー夫妻、ラジウム発見 日露戦争 (~ 05)
1905		ヘンリー・J. シュルター、ディーガン社に入社	
1910		Deagan Dinner Chime を開発 J.C. ディーガン、自身の論文で A=440 の調律基準を提言	東京がワシントンに桜を寄贈



独奏楽器としてのヴィブラフォン音楽の確立

1912		Deagan Tower を建設。世界最大の楽器工場と喧伝された	
1913	この頃からハリウッドが映画製作の中心となる		
1914	パナマ運河の開通 大戦に中立宣言	ディーガン社の委嘱によりパーシー・グレインジャーによって作曲された《In a Nutshell; suite for orchestra, piano and Deagan percussion instruments》がシカゴ交響楽団により世界初演	第一次世界大戦勃発
1917	第一次大戦に参戦		
1918			第一次世界大戦終結
1919			中国で五四運動
1920			国際連盟成立 ナチス結成
1921		Leedy Manufacturing Company、ヴィブラフォンの祖先を開発	
1927		シュルーター、ヴィブラハーブを開発。ディーガン社より発売	蒋介石、南京に国民政府を組織
1929	ウォール街で経済大恐慌始まる		ロンドン軍縮会議
1930		ライオネル・ハンプトン、ヴィブラフォンに出会う	
1933	FDR (フランクリン・デラノ・ルーズベルト)大統領就任 ニューディール政策実施	クレア・オマー・マッサー率いるマリimbaオーケストラがシカゴ万博で公演	ヒトラー政権成立
1934		J.C. ディーガン逝去	中国紅軍、長征を開始
1935		マッサー、100人の子供たちを引き連れてマリimba・オーケストラヨーロッパ公演を敢行。情勢不安により一部の公演が中止	ドイツ再軍備宣言
1936	FDR 再選 「風と共に去りぬ」出版		スペイン内乱、日独防共協定
1937			盧溝橋事件を発端に日中戦争勃発
1938	第二次大戦勃発 アメリカ中立宣言	Modern Marimba Method 出版	ミュンヘン会談
1939		Modern Vibraharp Method 出版	ノモンハン事件
1940	選抜徴兵法成立、FDR 三選		ベタン内閣降伏 日独伊軍事同盟
1941	「四つの自由」演説、武器貸与法成立、大西洋憲章を發表 日本軍の真珠湾奇襲、太平洋戦争始まる	Master solo arrangements; vibraharp, vibraphone and vibra-celeste 出版	日ソ中立条約 独ソ戦開始

文献注

---

- i 網代景介、岡田知之 1981, 1994 : 『新版打楽器辞典』音楽之友社, p.12,
- ii <https://www.loc.gov/item/jukebox-72130/>, Library of congerss, 2021 年 12 月 16 日閲覧
- iii <https://www.deaganresource.com/vibraphones.html>, The Deagan Resource, 2021 年 12 月 16 日  
閲覧
- iv 青木啓「バイブの地位、ジャズに確立 ライオネル・ハンプトンさんを悼む」『朝日新聞』, 2002 年  
9 月 5 日朝刊
- v Lionel Hampton, Jean Claude Forestier ‘The New Vibraphone Method’ by Lionel Hampton and  
Jean Claude Forestier, Edition Hug, pp.240-247, 1981
- vi ‘The Vibe Tribe’ “Newsweek” 40c, pp.105, May 15, 1967
- vii John Culhane, ‘Bell Expert Rings Up 60 Years’ “Chicago Daily News” March 27, 1965
- viii <https://www.deaganresource.com/vibraphones.html>, The Deagan Resource, 2021 年 12 月 16 日  
閲覧
- ix <https://www.madeinchicagomuseum.com/single-post/j-c-deagan-co/>, “ J. C. Deagan, Inc., est.  
1897 ”, Made in Chicago Museum, 2021 年 12 月 16 日閲覧
- x 通崎睦美 2013 『木琴デイズ 平岡養一「天衣無縫の音楽人生」』, 講談社, p.236,
- xi Clair Omar Musser Collection, ca.1819-2014, Percussive Arts Society, pp.1-3, 2021
- xii Shannon Wood : History of Deagan part 2 (1916-1939), Mallet shop.com  
Quarterly, pp.10, April 2004
- xiii 松本典久 2007 「グローバリズムの研究—「豊かな社会」を中心に」『慶應義塾大学日吉紀要 英語英  
米文学』 No.50, P.31,
- xiv Clair Omar Musser, Paul Yoder : Modern Vibraharp Method for Beginners, Neil A.Kjos  
Music Co, Chicago, ill.pp.18, 1939
- xv <https://www.deaganresource.com/vibraphones.html>, The Deagan Resource, 2021 年 12 月 16 日  
閲覧
- xvi Clair Omar Musser : Master solo arrangements : vibraharp, vibraphone and vibra-celeste,  
Gamble Hinged Music Co, pp.2, 1941
- xvii Clair Omar Musser Collection, Ca.1819-2014, Percussive Arts Society, pp.3, 2021
- xviii 猿谷要 1991 『物語アメリカの歴史 超大国の行方』中公新書, p277-282,